患者・家族・多色種共同型全人的ケアの創造

ー「いのち」をケアする人と空間ー

（代表）丸山 佳苗　（医薬保健学域保健学類看護学専攻３年）
大久保 咲貴　（医薬保健学域保健学類看護学専攻２年）
池上 暁　（医学部保健学科看護学専攻４年）
疋島 啓子　（医学部保健学科看護学専攻４年）
臺藏 綾霞　（医薬保健学域医学類３年）
横山 貴和子　（医薬保健学域医学類３年）

指導教員
榊原 千秋　（医薬保健研究域保健学系　助教）

Ⅰ．研究背景と動機

1967 年にセント・クリストファー・ホスピスを開設したシシリー・ソンダースはホスピスケアの中心に、身体的、精神的、社会的、哲学・宗教的な視点を持って人を全体としてとらえようとする全人的ケアを提唱した。以来現在まで、世界中でさまざまな形で「全人的ケア」はアプローチされ、その場に則して個性的に発展している。

私たちは 2008 年より人生の語りを文字として記録し残すことである「聞き書き」に取り組んできた。医療保健福祉に聞き書きの方法論を取り入れることで、患者・家族が「病い」を肯定的にとらえ、ありのままの人間性を受容・理解し、主体性のあるいきいきとした姿を取り戻すことを学んだ。また、活動を通して出会った医療保健福祉従事者からは患者や家族の声を活かしたケアを実践したいと考えていることを学んだ。こうした学びを私たち学生がより具体的に行動に移すために、患者・家族・医療保健福祉従事者（総称して「多色種」と呼ぶ）が相互に望むケアのあり方を、学生の目線で共有し患者・家族の語りを活かした「全人的ケアのための人と空間」を具現化してみたいと考えた。

Ⅱ．目的

メディカルカフェというケアの空間を具現化していくプロセスを通じて、全人的ケアの実現のための人と空間のあり方を考察し、「病い」をもつ当事者の立場に立った支援のかたちを提示することを目的とした。

Ⅲ．研究方法

１）前期：メディカルカフェの試創・模索、ココチカフェの具現化（７～１１月）

患者や家族の声、対人支援のプロからの学びを重ねた。がん患者さんと家族の声からつくる支援のかたちプロジェクト、生きるセンス食べるセンス出すセンス、いのちのスープの会、日本ホスピス在宅ケ

ア研究会、聞き書き学校2010、かなざわ元気が出る患者学講座、柳田邦男氏講演会「臨床のまなざし～2.5人称の視点～」、岡田圭氏講演会「いのちの最も輝く時」への参画を通し、患者、家族、医療保健福祉従事者、地域の一般市民と共に、地域に根差した全人的ケアのあり方を相互に検討した。

また、メディカルカフェ具現化にあたりワークショップを開いた。第一回「人と初めて出会う時に大切なこと」、第二回「どんな空間になったらいいか」について検討し、これらの学習の成果を活かして、11月6日－7日に医学展にてメディカルカフェを開催した。このカフェは患者や家族と医療者、学生が同じ目線で出会い、語り合い、学び合うことができる時間と空間を模索した独自のものであり、「ココチカフェ」と名付けた。

2）後期：先進施設への見学・比較検討（12～3月）

2011年2月24日－27日に、がんサロン「ちょっと寄ってみません家」及びホスピスケアを実践されている「野の花診療所」へ、学生8名で訪問した。がんサロンでは、施設見学やがん患者や家族に話を聞き、島根県立大学短期大学部の看護学生と意見交換を行った。野の花診療所では、施設見学や徳永進氏の講演会、スタッフとの交流会を通して、全人的ケアの実践活動について学んだ。

そして、人と空間のあり方について我々が試創したココチカフェの実践活動、及び先進施設への見学から得られた学びを通じて、全人的ケアのかたちの考察及び今後への展望を検討した。

Ⅳ．定義

全人的ないのちのケアの実現を模索するために、独自のメディカルカフェを試創し、ココチカフェと命名した。このココチカフェについて以下の3点のように定義する。

1. 患者や家族、医療保健福祉従事者と学生が一人の生活者として互いに出会い、語り合い、学び合うことができる、地域における全人的ケアの構築を目指す。
2. 街中にあることで、誰でも自由に気軽に立ち寄れ、その人がその人らしく過ごせる家庭的なあたたかさを目指す。
3. 患者や家族の語りを大切にしたコミュニケーションや、食事や文化的工夫を取り入れることで、対人・空間・地域環境のサポートを目指す

Ⅴ．実践と結果

1）前期

まず、全人的ケアのための人と空間のあり方を模索するために患者や家族、医療保健福祉従事者、学生、一般市民の相互のアクセスがある医学展を利用し、ココチカフェを2日間開催することとした。闘病生活中の患者や家族が、病院内や友人内のコミュニティーにおいてのみならず、家庭内においても不安や孤独感、疎外感をもつことに着目し、患者が‘患者’ではなく一人の生活者として過ごせるよう配慮した。患者や家族がそれぞれの人間性を発揮し、人生や病いの体験を発信できる場にしたいと考えた。また、音楽やアート、書籍など文化的要素に触れることができるだけでなく、患者自身が新たな趣味や創作活動などの目標をもつことによってその人らしさを耕す土壌となるだろう。

【当事者と対人支援のプロに学ぶ】

これらの想いをもって具体的な空間づくりを実践していく上で、私たちはがん患者を含む市民や医療保健福祉従事者が共に料理を作り、食事を楽しみながら語り合うことを大切にしている「いのちのスープの会」にてコミュニケーション、おもてなしや感謝の気持ちを伝える方法について学び、具体的な人と空間の実践方法について検討した。

【ワークショップの開催】

第一回「人と初めて出会う時に大切なこと」のまとめ～コミュニケーションや対話～

1. 挨拶や暮らしの中の話題を通して、患者や家族、医療保健福祉従事者や学生が横並びに向き合うことから、一人の生活者としての信頼関係が構築できる。
2. ゆっくり相手の語りに耳を傾け、最大の関心を向けることから、心地よい安心感やホスピタリティーが構築できる。

第二回「どんな空間になったらいいか」のまとめ～五感を通した心地いい人と空間～

1. 手作りの食は、味覚や視覚・嗅覚を通して味わうことができる生活の喜びの基本となる。
2. 音楽、アート、ことば、色彩豊かな飾りつけは、緊張をほぐして心を落ち着け、新しいひらめきや感覚との出会いとなる。
3. 来訪者自身が描き出すメッセージや絵は、自己の過去・現在・未来を整理し、表出する機会となる。

【ココチカフェの実践内容】

11月6日－7日　金沢大學宝町キャンパス

手作りカフェ、ピアノミニコンサート、ライブラリコーナー、メッセージキルトづくり「自分の根源」「30年後の自分へのメッセージ」、いのちのかたち展　絵画：愛育学園・美術教室Hart、絵本：上野慈子「見えない人体」、写真：岡田圭NY発「いつくしむ心」

加えて、順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授、NPO法人「がん哲学外来」理事長である樋野興夫医師をお呼びして、がん患者さん固有の生きる哲学をみつめる患者さんと医療者の対話の場として「がん哲学外来」とその講演会「暇気な風貌＆偉大なるお節介」を開催した。

樋野先生のがん哲学外来の見学や講演から、対話では患者や家族の話を聴くだけではなく、医療保健福祉従事者も心をひらいて自らの思いや経験を話すことで、双方向の流れが築かれて、効果を発揮することを学んだ。また、ココチカフェで大切にしたこの対話には患者や家族のケアの面と医療保健福祉の面において、其々以下の効果があると考えた。

患者や家族のケアの面

1. 患者や家族が抱えている不安や孤独感、疎外感を受けとめ、お互いに誰もが一人の人として向き合い、和らげる。
2. 共に患者固有の哲学をみつめ、その人らしく人生を生きる支援をする。
3. 患者や家族の病いの体験を共有する。
4. 同じ悩みや苦しみもつ人々が共感し、支えあうことができる患者同士の交流を支援する。

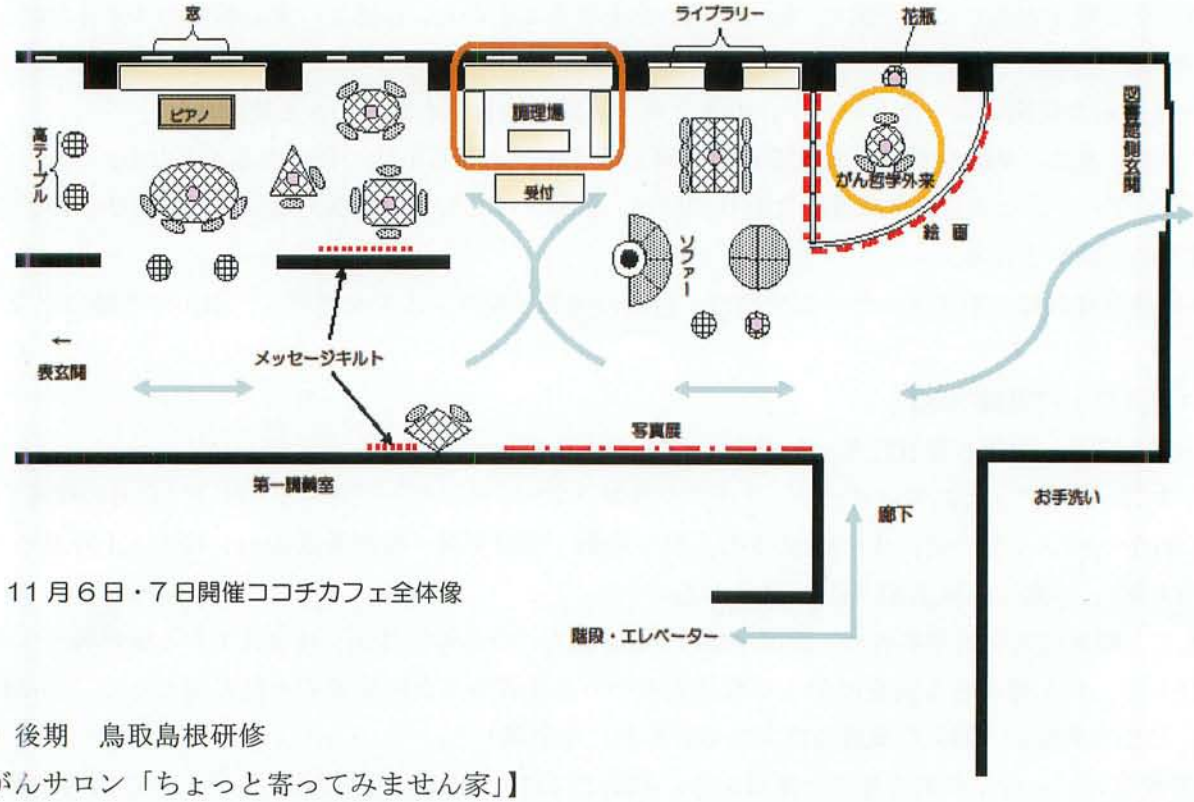
医療保健福祉の面

1. 患者・家族・医療者が、病院外で一人の生活者としてお互いに交流することで、新しい横並びの関係

を再構築・向上できる。

2. 近隣の病院や、他の関連施設の情報を提供するコーナーを設けることで、各医療施設と患者をつなぐ架け橋となる。
3. 健康相談窓口として病気の早期発見と治療への足がかりとなる
4. 病院や医療者に対する患者の意見を取り入れる目安箱となる。

そして、患者や家族、医療保健福祉従事者、一般市民、学生らの多方面の協力を得る中で、全人的なケアとは、多色種の手で共に創りあげられるものであることを直に学んだ。このような全人的ケアを目指して企画する学生の試みが励みになると話す訪問者や先生も多く、多色種間の連携関係の需要を再確認すると同時に、今回共に創り上げたコミュニティーで課題や理念を今後も共有していき、国内で全人的ケアに着目した空間づくりをしていく際の協力基盤としたい。



11月6日・7日開催ココチカフェ全体像

2）後期　鳥取島根研修

【がんサロン「ちょっと寄ってみません家」】

がんサロン「ちょっと寄ってみません家」は、がん患者や家族がお茶を飲みながら療養上の悩みを話したり、情報交換を行ったりする場として、2006年4月に島根県出雲市内に患者と家族の立場である佐藤愛子氏を中心に創られた。島根県は「七位一体」と呼ばれる多色種(患者・家族、医療、行政、議会、企業、教育、メディアの七分野)が人と人とのつながりを大切に連携しているがん対策の先進地域である。

このサロンでは、笑顔とおもてなしの心が大切にされ、「病い」を肯定的に捉えることで自分のありのままの暮らしや生きる元気を取り戻せたという声の重なりで築かれていた。サロン内には大テーブルを囲うように椅子や写真や作品が広がり、対話や活動の共有を通して当事者の思いに寄り添う姿勢から、患者・家族が自身の思いを表出しやすい心遣いを感じた。

【野の花診療所】

野の花診療所はホスピスケアを実践している診療所で、がんに限らず、死と向き合う人のための場所

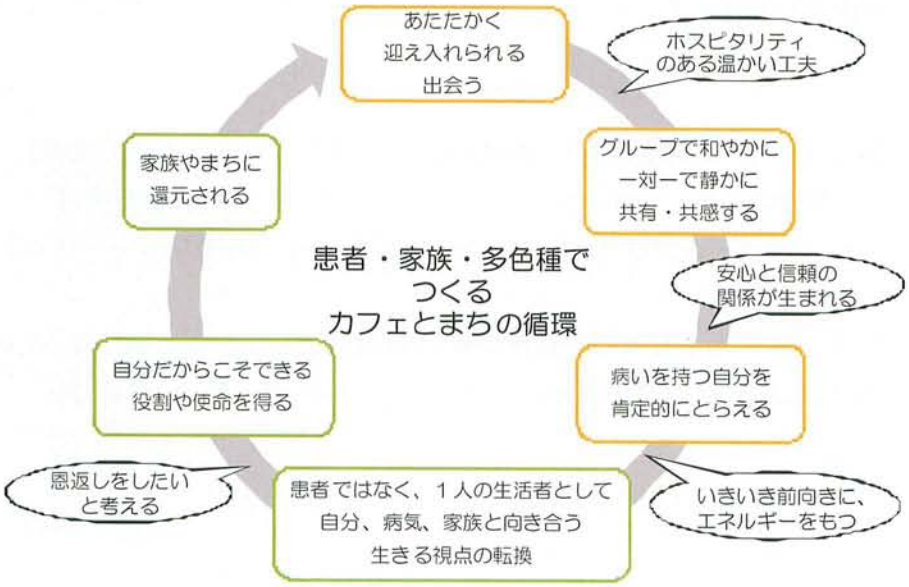
として徳永進医師により開設された。在宅ホスピスとがん相談外来、代替療法として鍼灸治療、リンパドレナージ外来などの代替療法、往診、訪問診療を行っており、1階に診療所、2階に19床の病床が設置されている。

ありのままの日常の暮らしと文化が生きる人と空間の工夫として、院内には図書館、瞑想室、カフェ、外部の人が利用できる食堂があり、各所には野の花が飾られ、自然の光と心休まる音楽、に包まれている。また、個別性も大切にされており、各部屋には草木の染のれんや木彫りの表札があり、エンジェルケアのために1つ1つ縫われた手作りのハンカチがあった。そして、患者と家族の過去と未来をつなぐポストや、亡くなられた方の名前を刻む桜の木があったのが印象的だ。いずれも五感が触発されるような細やかな心遣いであった。

Ⅵ　研究成果と考察

ココチカフェの具現化と先進地域の見学を通して、以下の6つのプロセスで患者と家族の暮らす地域に貢献できると考えた。

1. 患者・家族・医療福祉従事者らが横並びの立場で互いに出会い、ホスピタリティーのある温かい工夫で迎えられる。
2. グループ間や一対一で、自らの悩みや先の不安などを表現し、語り合い、共有する場となり、安心と信頼の関係が築かれる。
3. 病いをもつ自分を肯定的にとらえることができ、いきいきと前向きなエネルギーをもつ。
4. 患者ではなく一人の生活者として自分、病気、家族と向き合うことができる「生きる」という視点の転換を得る。
5. その人らしさを活かした役割や使命を得る。
6. 当事者の経験や思いが、家庭やまちに還元される。



そして、この循環がらせんを描くように繰り返され、以下の3つのプロセスで地域に根差し、多色種が地域を担う一員として地域環境の理解を深め、生活者としての視点と地域の独自性を活かしたより包括的な全人的ケアのある新しい地域創造ができるだろう。

1. 境遇や社会環境の似ているもの同士が、互いにパートナーとして寄り添い助け合うピア・エンパワメントが築かれる。
2. 多様な立場の相互作用により地域の連帯感・安心力が生まれ、コミュニティー・エンパワメントが築かれる。
3. これらの顔の見える関係づくりから、人々の信頼、規範、ネットワークなどのソーシャル・キャピタルが築かれる。

Ⅶ 結論と展望

全人的ケアのためには、患者と家族がその人らしく生活者として地域で暮らすシステムが必要である。このような心地よいホスピタリティーのあるメディカルカフェは、医療だけでなく暮らしや文化の視点から、患者や家族、医療保健福祉従事者、学生が出会い、語り、学び合う機会となるだけでなく、多色種のネットワークの拠点として、ピア・エンパワメント及びコミュニティー・エンパワメントにつながり、新たな一社会資産となると考える。

今後も学生が主体となって、患者や家族、医療保健福祉従事者、市民に働きかけ、全人的ケアのあり方を相互に学び合うことで、新たな支援のかたちを創造し、様々な生活者の視点が活かされた地域の医療・保健・福祉のかたちの創造につなげる第一歩として、次年度は街中でのココチカフェの創設を模索したい。

Ⅷ 謝辞

本研究を進めるに当たり、ココチカフェや研修の主旨についてご理解とご協力を下さいました「ちょっと寄ってみません家」、「萌の会」、「BCSG」、「野の花診療所」の皆さま、また厚くご指導くださいました順天堂大学樋野興夫先生、金沢美術工芸大学横川善正先生、金沢大学山本博先生、天野良平先生、榊原千秋先生に心より感謝申し上げます。

Ⅸ 参考文献

ミルトン　メイヤロフ（田村真・向野宜之訳）（2005）『ケアの本質　生きることの意味』、ゆみる出版
シシリー　ソンダース（岡村昭彦訳）（2006）『ホスピス　その理念と運動』、雲母書房
大木幸子（2010）「コミュニティ・エンパワメントのための援助技術」『保健師ジャーナル』Vol.66 No.07 pp.660-661
尾島俊之（2011）「ソーシャル・キャピタルと地域保健」『保健師ジャーナル』Vol.67 No.02 pp.96-100
市原美穂（2011）「宮崎をホスピスに」『保健師ジャーナル』Vol.67 No.02 pp.114-118